

博士論文（要約）

論文題目 中国中古の類書と士人社会

氏 名 付 晨晨

目 次

序 章 中国中古類書研究序説	1
はじめに	1
一、類書研究の総括	5
(一) 類書の定義	8
(二) 類書の起源	11
(三) 類書の発展	13
二、魏晋南北朝隋唐期の類書研究	15
三、中古の類書と士人	22
おわりに—本書の構成—	27
第一章 東晋南朝の国子学と积奠	31
はじめに	31
一、国子学成立以前—漢魏時期の太学—	34
二、国子学の成立—西晋の官学と积奠—	39
三、東晋の太学・国子学と积奠	48
(一) 元帝期	48
(二) 明・成帝期	51
(三) 穆帝期	55
(四) 孝武帝期	55
四、南朝の国子学と积奠	60
(一) 劉宋期	60
(二) 南齊期	63
(三) 梁期	68
(四) 陳期	70
五、東晋南朝の积奠と国子学での実践	71
おわりに	85
【付表】 東晋南朝の官学と积奠	87
第二章 南朝の学館と学士	93
はじめに	93
一、周統之の学館	94
(一) 周統之の家系と学問	95
(二) 学館設立の経緯	97
(三) 周統之の交遊	99
二、儒玄文史四館	100
(一) 雷次宗の儒学館	101

(二) 玄・史・文三館.....	107
(三) 儒玄文史四館の意義.....	111
三、総明観.....	113
(一) 総明観祭酒.....	114
(二) 総明学士.....	116
(三) 総明観での活動.....	117
四、劉瓛の学館.....	119
(一) 劉瓛の家系と生平.....	119
(二) 劉瓛の学生.....	123
(三) 劉瓛の交遊.....	132
(四) 劉瓛の歴史的 위치づけ.....	134
五、梁の五館.....	136
(一) 梁五館の設置.....	137
(二) 梁五館と五礼編纂.....	138
(三) 梁五館の位置付け.....	142
(四) 梁五館の意義.....	144
おわりに.....	147
第三章 齊梁類書の誕生	
一 初期類書の系譜と南朝士人一	149
はじめに.....	149
一、初期類書の範囲と系譜.....	153
二、『皇覧』から『華林遍略』へ.....	160
三、齊梁類書の性格.....	166
四、魏晉知識の典故化と齊梁類書の編纂.....	173
おわりに.....	183
第四章 南朝類書の性格	
一 『藝文類聚』をてがかりとして一	185
はじめに.....	185
一、初期の類書の性格.....	187
二、『藝文類聚』から見た『華林遍略』の条文配列.....	192
(一) 先行研究の検討.....	192
(二) 異例からみた『藝文類聚』の条文配列.....	194
(三) 『華林遍略』の条文配列.....	198
三、初期類書と漢唐間注釈史.....	201
(一) 『華林遍略』条文配列の性格.....	201
(二) 南朝系類書と漢唐間注釈史.....	202

おわりに.....	207
第五章 『修文殿御覧』編纂考	
一南朝類書の北伝と北朝類書の誕生一.....	211
はじめに.....	211
一、『華林遍略』から『修文殿御覧』へ.....	212
二、北朝類書としての『修文殿御覧』.....	217
三、『修文殿御覧』の編纂過程とその目的.....	222
おわりに.....	231
第六章 隋唐類書の展開	
一『崇文総目』と『新唐書』藝文志の比較研究一.....	233
はじめに.....	233
一、目録中の「類書」.....	234
二、『隋書』と『旧唐書』の経籍志から見える隋唐類書の発展.....	237
三、『旧唐書』と『新唐書』の類書観の相違.....	242
四、『崇文総目』と『新唐書』の類書類.....	247
五、類書としての『通典』・『会要』.....	261
おわりに.....	265
終章 中国士人・皇帝と学問の展開	269
一、中国中古における類書の形成と発展.....	269
(一) 萌芽期—『皇覧』まで—.....	270
(二) 形成期—『華林遍略』まで—.....	271
(三) 発展期—『通典』と『会要』まで—.....	274
(四) 完成期—『太平御覧』・『太平広記』・『冊府元龜』—.....	276
(五) 日本への伝播.....	277
二、展望—家伝・師受・独学—.....	278
初出一覧	284
参考文献一覧	285
日本語文献.....	285
中国語文献.....	292

本 文

5年以内に出版予定

参考文献一覧

(日本語論文は五十音順、外国語論文はアルファベット順)

日本語文献

会谷佳光『宋代書籍集散考—新唐書藝文志積氏類の研究—』汲古書院、二〇〇四年。

飯田瑞穂「『秘府略』に関する考察」同『飯田瑞穂著作集 三』吉川弘文館、二〇〇年、初出一九七五年。

池田昌広「『日本書紀』と六朝の類書」『日本中国学会報』五九、二〇〇七年。

石井 仁「南朝における随府府佐—梁の簡文帝集團を中心として—」『集刊東洋学』五三、一九八五年。

石井 仁「梁の元帝集團と荊州政權—「随府府佐」再論—」『集刊東洋学』五六、一九八六年。

井上 進「四部分類の成立」『名古屋大学文学部研究論集史学』四五、一九九九年。

井上 進「貴族の蔵書とその周辺」同『中国出版文化史—書物世界と知の風景—』名古屋大学出版会、二〇〇二年。

内藤あゆち(榎本あゆち)「南朝の寒門・寒人問題について—その研究史的考察—」『名古屋大学東洋史研究報告』四、一九七六年。

榎本あゆち「梁の中書舎人と南朝賢才主義」『名古屋大学東洋史研究報告』一〇、一九八五年。

榎本あゆち「劉孝標をめぐる人々—南朝政治史上の平原劉氏—」『六朝學術学会報』一五、二〇一四年。

遠藤光正『類書の伝来と明文抄の研究—軍記物語への影響—』あさま書房、一九八四年。

大内文雄「梁代仏教類書と『経律異相』」同『南北朝隋唐期仏教史研究』法蔵館、二〇一三年、初出一九七七年。

- 大内文雄「南朝梁の定林寺と衆經要抄について」『印度学仏教学研究』二六、一九七七年。
- 大川富士夫「晋代の江南豪族について」同『六朝江南の豪族社会』雄山閣、一九八七年、初出一九七二年。
- 大淵貴之『唐代勅撰類書初探』研文出版、二〇一四年。
- 大淵貴之「唐代勅撰類書の中核概念—『藝文類聚』と『群書治要』を手がかりとして—」前掲書、初出二〇〇六年。
- 大淵貴之「勅撰類書の政治的意義—『藝文類聚』編纂を例として—」前掲書、初出二〇一〇年。
- 大淵貴之「『藝文類聚』本文批判の—指標—詩文一部立ての原則について—」前掲書、初出二〇一〇年。
- 大淵貴之「唐代類書に見える避諱の影響—『藝文類聚』における部立て改変を中心に—」前掲書、初出二〇〇八年。
- 岡部毅史「梁簡文帝立太子前夜—南朝皇太子の歴史的 position に関する—考察—」『史学雑誌』一一八—、二〇〇九年。
- 尾崎 康「北齊の文林館と修文殿御覽」松本信広先生古稀記念『史学』四〇—二・三、一九六七年。
- 加賀栄治「杜預の春秋解釈方法・態度」同『中国古典解釈史・魏晉篇』勁草書房、一九六四年、初出一九五三・一九五五年。
- 加地伸行代表、『類書の総合的研究』平成六・七年度科学研究費補助金研究成果報告書、一九九六年。
- 勝村哲也「修文殿御覽卷第三百—香部の復元—森鹿三氏「修文殿御覽について」を手掛りとして—」『日本仏教学会年報』三八、一九七二年。
- 勝村哲也「『修文殿御覽』新考」『鷹陵史学』三・四、一九七七年。
- 勝村哲也「修文殿御覽天部の復元」山田慶児編『中国の科学と科学者』京都大学人文科学研究所所収、一九七八年。
- 勝村哲也「藝文類聚の条文構成と六朝目録という関連性について」『東方学報（京都）』六二、一九九〇年。

- 勝村哲也「類書の歴史」『月刊しにか—特集・中国の百科全書—』九一三、一九九八年。
- 加藤 聡「類書『初学記』の編纂—その太宗御製偏重をてがかりとして—」『東方学』一一一、二〇〇六年。
- 金井之忠「政典と通典」同『唐代の史学思想』弘文堂、一九四〇年。
- 川合 安「南朝の御史台」『集刊東洋学』六〇、一九八八年。
- 川合 安『南朝貴族制研究』汲古書院、二〇一五年。
- 川合 安「元嘉時代後半の文帝親政」前掲書、初出一九八三年。
- 川合 安「六朝隋唐の「貴族政治」」前掲書、初出一九九九年。
- 川合 安「南朝官人の起家年齢」前掲書、初出二〇〇五年。
- 川合 安「日本の六朝貴族制研究」前掲書、初出二〇〇七年。
- 木島史雄「類書の発生—『皇覧』の性格をめぐって—」『汲古』二六、一九九四年。
- 木島史雄「六朝前期の孝と喪服」小南一郎編『中国古代礼制研究』京都大学人文科学研究所所収、一九九五年。
- 北川俊昭「『通典』編纂始末考—とくにその上献の時期をめぐって—」『東洋史研究』五七一一、一九九八年。
- 栗山雅央「「三都賦」劉逵注の注釈態度」『中国文学論集』四〇、二〇一一年。
- 興膳 宏「潘岳年譜稿」『名古屋大学教養部紀要人文科学・社会科学』一八、一九七四年。
- 興膳 宏「隋書経籍志道経序の道教教理—特に無上秘要という関連について—」『京都大学文学部研究紀要』三二、一九九三年。
- 古勝隆一「南齊の国学と積奠」同『中国中古の学術』研文出版、二〇〇六年、初出二〇〇五年。
- 小島憲之『上代日本文学と中国文学—出典論を中心とする比較文学的考察—』塙書房、一九六四年。
- 小林 聡「泰始礼制から天監礼制へ」『唐代史研究』八、二〇〇五年。

- 小林 聡「晋南朝における宮城内省区域の展開—梁陳時代における内省の組織化を中心に—」『九州大学東洋史論集』三五、二〇〇七年。
- 小林 昇「六朝時代の太学」同『中国・日本における歴史観と隠逸思想』早稲田大学出版部、一九八三年、初出一九五五年。
- 小南一郎「中国古代の学と学校」同編『学問のかたち—もう一つの中国思想史—』汲古書院、二〇一四年。
- 佐川英治「東魏北齊革命と『魏書』の編纂」『東洋史研究』六四—一、二〇〇五年。
- 杉山一也「類書概念」加地伸行代表、平成六・七年度科学研究費補助金研究成果報告書『類書の総合的研究』所収、一九九六年。
- 関清 孝「郭璞の注釈学—『爾雅注』の方法—」『東方学』一〇九、二〇〇五年。
- 千田 豊「釈奠と鹵冑の礼中国中世の皇太子と儀礼」『歴史文化社会論講座紀要』一四、二〇一七年。
- 大東文化大学東洋研究所編『藝文類聚訓読付索引第一巻』大東文化大学東洋研究所、一九九〇年。
- 多賀浪砂「『藝文類聚』所引『搜神記』考」『中国文学論集』一二、一九八三年。
- 多賀秋五郎『唐代教育史の研究—日本学校教育の源流—』不昧堂書店、一九五三年。
- 高橋 均「『日本国見在書目録』の基軸—その編纂過程をめぐって—」『中国文化』七六、二〇一八年。
- 谷川道雄「北朝政治史と漢人貴族」同『隋唐帝国形成史論』筑摩書房、一九七一年、初出一九六二年。
- 谷川道雄『中国中世の探求—歴史と人間—』日本エディタースクール出版部、一九八七年。
- 谷川道雄「『著作史』の一視点—著述と纂輯—」前掲書、初出一九七七年。

- 谷川道雄「隋唐帝国への道」同『中国中世の探求—歴史と人間—』前掲書、初出一九七七年。
- 塚本善隆「中国仏教史上の慧遠（三三四—四一六）とその教団」同『中国仏教通史（第一卷）』春秋社、一九七九年。
- 津田資久「漢魏交替期における『皇覽』の編纂」『東方学』一〇八、二〇〇四年。
- 栃尾 武「類書の研究序説—魏晋六朝唐代類書略史—」『成城国文学論集』一〇、一九七八年。
- 栃尾 武「類書の研究序説—2—五代十国宋代類書略史」『成城国文学論集』一一、一九七九年。
- 栃尾 武「類書の研究序説—3—五代十国宋代類書略史—承前—」『成城国文学論集』一二、一九八〇年。
- 礪波 護「貴族の時代から士大夫の時代へ—宋代士大夫の成立—」同『唐の行政機構と官僚』中央公論社、一九九八年、初出一九六三年。
- 内藤虎次郎（内藤湖南）「通典の著者杜佑」『龍谷大学論叢』二八九、一九三〇年。
- 内藤湖南『支那史学史』平凡社、一九九二年。
- 内藤湖南「冊府元龜と資治通鑑—帝王学の変化」前掲書。
- 内藤湖南「六朝末唐代に現れた史学上の変化」前掲書。
- 永田拓治「漢晋史研究における文献史料の可能性—人物伝を中心に—」伊藤敏雄編科学研究費補助金基盤研究 A 研究成果報告書『石刻史料と史料批判による魏晋南北朝史研究』、二〇一五年。
- 永田知之「文場秀句小考—「蒙書」と類書と作詩文指南書の間—」『敦煌写本研究年報』二、二〇〇八年。
- 中村圭爾「六朝貴族制論」同『六朝政治社会史研究』汲古書院、二〇一三年、初出一九九三年。
- 西川利文「漢代博士弟子制度の展開」『鷹陵史学』一七、一九九一年。

福井重雅『漢代儒教の史的研究—儒教の官学化をめぐる定説の再検討—』汲古書院、二〇〇五年。

福田俊昭「『藝文類聚』卷八十四本文の構成について」大東文化大学東洋研究所編『藝文類聚訓読付索引第八十四卷』大東文化大学東洋研究所、二〇一一年。

福原啓郎『魏晋政治社会史研究』京都大学学術出版会、二〇一二年。

福原啓郎「晋辟雍碑に関する考察」前掲書、初出一九九八年。

福原啓郎「西晋における国子学の創立に関する考察」前掲書、初出一九九八年。

松浦千春「北魏朝の積奠儀礼と孔子廟」『一関工業高等専門学校研究紀要』四五、二〇一〇年。

松浦千春「魏晋南朝の帝位継承と積奠儀礼」『東北大学東洋史論集』九、二〇〇三年。

松本光雄「類書に表現される中国社会の特性」『東洋史研究』一六一、一九五七年。

宮崎市定『九品官人法の研究—科挙前史—』中央公論社、一九九七年。

宮崎市定「魏晋の九品官人法」前掲書。

宮崎市定「南朝における流品の発達」前掲書。

宮崎市定「梁陳時代の新傾向」前掲書。

麦谷邦夫「道教類書と教理体系」同『六朝隋唐道教思想』岩波書店、二〇一八年、初出二〇〇七年。

村上嘉実「慧遠教団と国家権力」同『六朝思想史研究』、平楽寺書店、一九七三年、初出一九五九年。

森 鹿三「亮阿闍梨兼意の「香要抄」について」塚本博士頌寿記念会編『仏教史学論集—塚本博士頌寿記念—』塚本博士頌寿記念会所収、一九六一年。

森 鹿三「修文殿御覧について」『東方学報（京都）』三六、一九六四年。

森三樹三郎『六朝士大夫の精神』同朋舎、一九八六年。

- 森三樹三郎「玄儒文史」前掲書、初出一九五四年。
- 安田二郎『六朝政治史の研究』京都大学学術出版会、二〇〇三年。
- 安田二郎「梁武帝の革命と南朝門閥貴族体制」前掲書、初出一九七〇年。
- 安田二郎「元嘉時代政治史試論」前掲書、初出一九七三年。
- 安田二郎「王僧虔「誠子書」考」前掲書、初出一九八一年。
- 安田二郎「西晋朝初期政治史試論」前掲書、初出一九九五年。
- 弥永貞三「古代の積奠について」同『日本古代の政治と史料』高科書店、一九八八年、初出一九七二年。
- 柳川順子「従『北堂書鈔』的編集態度看虞世南的文学観」『中国文学論集』二二、一九九三年。
- 柳川順子「『北堂書鈔』引書考—集部以外の文献を中心として—」『筑紫女学園大学紀要』六、一九九四年。
- 柳川順子「虞世南における『北堂書鈔』編纂の意図とその文学史的意義」『東方学』九〇、一九九五年。
- 山田慶児「中国の文化と思考様式」同『混沌の海へ—中国的思考の構造—』筑摩書房、一九七五年。
- 山田慶児「本草における分類の思想」同『本草と夢と錬金術と—物質的想像力の現象学』朝日新聞社、一九九七年。
- 湯浅邦弘「類書の成立」加地伸行代表、平成六・七年度科学研究費補助金研究成果報告書『類書の総合的研究』所収、一九九六年。
- 吉川忠夫『六朝精神史研究』同朋舎出版、一九八四年。
- 吉川忠夫「范寧の学問」前掲書、初出一九六七年。
- 吉川忠夫「禁錮と学問—とくに何休の場合—」前掲書、初出一九七六年。
- 吉川忠夫「顔師古の『漢書注』」前掲書、初出一九七九年。
- 吉川忠夫「六朝時代における家学とその周辺」小南一郎編『学問のかたち—もう一つの中国思想史—』所収、汲古書院、二〇一四年。

中国語文献

- 白化文「敦煌遺書中の類書簡」『中国典籍与文化』一九九九年第四期。
- 卜憲群·張南『中国魏晋南北朝教育史』史仲文·胡曉林主編『中国全史』人民出版社、一九九四年。
- 陳鴻森「隋志所載劉先生『尚書義』作者考」『歷史語言研究集刊』一九九八年第六十九本第四分。
- 陳寅恪「儀禮」同『隋唐制度淵源略論稿·唐代政治史述論稿』三聯書店、二〇〇一年、初出一九三九年。
- 陳寅恪「南北对立形勢分析」万繩楠整理『陳寅恪魏晉南北朝史講演錄』貴州人民出版社、二〇〇七年。
- 陳 垣『二十史朔閏表』商務印書館、一九五六年。
- 程樂松『中古道教類書与道教思想』宗教文化出版社、二〇一七年。
- 程舜英『魏晉南北朝教育制度史資料』北京師範大学出版社、一九八八年。
- 程蘇東「魏晉至隋唐經目演變」同『從六藝到十三經—以經目演變為中心—』北京大学出版社、二〇一八年。
- 程章燦「象闕与蕭梁政權始建期的正統焦慮—讀陸倕『石闕銘』—」『文史』二〇一三年第二輯。
- 戴克瑜·唐建華『類書的沿革』四川省圖書館学会、一九八一年。
- 方師鐸『傳統文学与類書之關係』天津古籍出版社、一九八六年。
- 費海璣「北齊文林館」『大陸雜誌』二八一一二、一九六八年。
- 高 敏「兩晉時期的兵戶制考略」同『魏晉南北朝兵制研究』大象出版社出版、二〇〇二年、初出一九九二年。
- 高明士「漢唐間学校教育發展的特質」同『唐代東亞教育圈的形成—東亞世界形成史的一側面—』国立編訳館中華叢書編審委員会、一九八四年。
- 高明士「官学教育体制的發展」同『中国傳統政治与教育』文津出版社、二〇〇三年。

- 高明士「積奠禮制與講經儀禮」同『中國中古的教育與學禮』國立臺灣大學出版中心、二〇〇五年。
- 葛兆光「目錄、類書和經典注疏中所見七世紀中國知識與思想世界的輪廓」同『中國思想史（第二卷）』復旦大學出版社、二〇〇一年。
- 郭秉文『中國教育制度沿革史』商務印書館、一九二二年。
- 郭 醒『『藝文類聚』研究』遼海出版社、二〇一七年。
- 韓建立『『藝文類聚』纂修考論』花木蘭文化出版社、二〇一二年。
- 胡寶國『漢唐間史學的發展（修訂本）』北京大學出版社、二〇一四年。
- 胡寶國「經史之學」·「文史之學」前揭書、初出一九九九年。
- 胡寶國「州郡地志」前揭書、初出二〇〇一年。
- 胡寶國「知識至上的南朝學風」『文史』二〇〇九年第四輯。
- 胡寶國「東晉南朝的書籍整理與學術總結」『中國史研究』二〇一七年第一期。
- 胡道靜『中國古代的類書』中華書局、一九八二年。
- 胡道靜「類書的起源和遠源」前揭書。
- 胡道靜「『爾雅』為分類書籍之所昉」前揭書。
- 胡道靜「『壽光書苑』」前揭書。
- 華 喆「『禮記子本疏義』校錄」同『禮是鄭學—漢唐間經典詮釋變遷史論稿一』三聯書店、二〇一八年、初出二〇一二年。
- 黃永年「說類書和叢書的興替」同『學苑與書林』上海書店出版社、二〇〇六年、初出二〇〇二年。
- 李華偉『『法苑珠林』研究—晉唐佛教的文化整合—』中國社會科學出版社、二〇一五年、博論二〇一四年。
- 李 俊「論劉宋元嘉四學制度及其與南朝學術史之關係」『中國文化研究』二〇一〇年第二期。
- 李 磊「魏晉之際國子太學之議與司馬氏政權的合法性建構」『江海學刊』二〇〇六年第六期。

- 李玲玲『『初学記』引經考』中国社会科学出版社、二〇一三年、博論二〇〇九年。
- 李小彤「類書研究現狀綜述」『中国詩歌研究動態』二〇〇七年第二輯。
- 劉安志『新資料与中古文史論稿』上海古籍出版社、二〇一四、初出二〇一二年。
- 劉安志「『修文殿御覽』佚文輯校」前揭書、初出二〇一二年。
- 劉安志「〈華林遍略〉乎？〈修文殿御覽〉乎？—敦煌写本 P. 2526 号新探一」前揭書、初出二〇一三年。
- 劉安志「關於中古官修類書的源流問題」前揭書、初出二〇一三年。
- 劉剛「八十年類書研究之探討」『大学圖書館學報』二〇〇〇年第二期。
- 劉全波『類書研究通論』甘肅文化出版社、二〇一八年。
- 劉全波「百年敦煌類書研究述評」前揭書、初出二〇一〇年。
- 劉全波『唐代類書編纂研究』花木蘭文化出版社、二〇一八年。
- 劉全波『魏晉南北朝類書編纂研究』民族出版社、二〇一八年。
- 劉全波「華林遍略」前揭書、初出二〇一三年。
- 劉淑芬「六朝建康的園宅」同『六朝的城市与社会』台湾學生書局、一九九二年
- 年
- 劉葉秋『類書簡說』上海古籍出版社、一九八〇年。
- 劉葉秋「唐歐陽詢等『藝文類聚』」前揭書、一九八〇年。
- 柳詒徵「南朝太学考」『史学雜誌』第一卷第五·六期、第二卷第一·二·三期、一九二九年—一九三〇年。
- 羅新·葉煒「張妙芬墓誌」同『新出魏晉南北朝墓志疏証』中華書局、二〇〇五年
- 馬楠「『新唐書藝文志』增補修訂『旧唐書經籍志』的三種文献来源」『中国典籍与文化』二〇一八年第一期。
- 毛礼銳·沈灌群主編『中国教育通史（第二卷）』山東教育出版社、一九八六年
- 年

聶激萌「從丙部到史部—漢唐之間目錄学史部的形成—」『中国史研究』二〇一五年第三期。

戚志芬『中国的類書、政書和叢書』商務印書館、一九九一年。

錢穆「略論魏晉南北朝學術文化与當時門第之關係」同『中国學術思想史論叢三』三聯書店、二〇〇九年、初出一九六三年。

屈直敏『敦煌写本類書『勵忠節鈔』研究』民族出版社、二〇〇七年。

史金波·黃振華·聶鴻音『類林研究』寧夏人民出版社、一九九三年。

唐光榮『唐代類書与文学』巴蜀書社、二〇〇八年。

唐雯「『藝文類聚』『初學記』与唐初文学觀念」『西安文理学院學報社会科学版』二〇〇三年第一期。

唐長孺「讀『抱朴子』推論南北學風的異同」同『魏晉南北朝史論叢』三聯書店、一九五五年。

唐長孺『魏晉南北朝史論叢統編』三聯書店、一九五九年。

唐長孺「南北朝後期科舉制度的萌芽」前揭書。

唐長孺「南朝寒人的興起」前揭書。

唐長孺「論南朝文学的北傳」同『唐長孺社会文化史論叢』武漢大學出版社、二〇〇一年所収、初出一九九三年。

唐長孺『魏晉南北朝隋唐史三論—中国封建社会的形成和前期的变化—』武漢大學出版社、一九九二年。

田余慶『東晉門閥政治』北京大學出版社、一九八九年。

田余慶「桓溫的先世和桓溫北伐問題」前揭書。

田余慶「論郗鑒」前揭書。

田余慶「庾氏之興和庾·王江州之爭」前揭書。

王國維「漢魏博士考」『觀堂集林附別集』中華書局、二〇〇四年、初出一九一二年。

王建軍「論南朝學館」『教育評論』一九八七年第三期。

王建軍主編『中国教育通史第四卷魏晉南北朝卷』王炳照、李國鈞、閻國華主編『中国教育通史』北京師範大學出版社、二〇一三年

- 王三慶『敦煌本古類書『語對』研究』文史哲出版社、一九八五年。
- 王三慶『敦煌類書』復文圖書出版社、一九九三年。
- 王燕華『中国古代類書史視域下的隋唐類書研究』上海人民出版社、二〇一八年。
- 王 瑤「隸事·声律·宮体—論齊梁詩—」同『中古文學史論』北京大學出版社、一九九八年、初出一九四八年、
- 王永平「漢靈帝之置「鴻都門學」及其原因考論」『揚州大學學報人文社會科學版』一九九五年第五期。
- 聞一多「類書與詩」同『唐詩雜論』上海古籍出版社、一九九八年、初出一九三四年。
- 夏南強『類書通論』湖北人民出版社、二〇〇一年。
- 辛德勇「由梁元帝著述書目看兩晉南北朝時期的四部分類體系」『文史』一九九九年第四輯。
- 閔 寧「齊梁「五禮儀注」修撰考」同『古代禮學禮制文獻研究叢稿』商務印書館、二〇一八年、初出二〇一一年。
- 閻步克「南朝太學考」同『察舉制度變遷史稿』遼寧大學出版社、一九九一年、初出一九九〇年。
- 楊承彬『秦漢魏晉南北朝教育制度』台灣商務印書館、一九七八年。
- 楊 寬「我國古代大學的特點及其起源」同『古史新探』中華書局、一九六五年、初出一九六二年。
- 余嘉錫「晉辟雍碑考証」同『余嘉錫論學雜著』中華書局、一九六三年、初出一九三二年。
- 張滌華『類書流別（修訂本）』商務印書館、一九八五年。
- 張固也「論『新唐書』藝文志的史料來源」『吉林大學社會科學學報』一九九八年第二期。
- 張旭華「蕭梁經學生策試入仕制度考述」『史學月刊』一九九四年第六期。
- 趙超編『漢魏南北朝墓志彙編』天津古籍出版社、一九九二年。

趙立新「梁元帝『金樓子·聚書篇』所見南朝士人的聚書、文化和社群活動」
甘懷真編『身分·文化與權力—士族研究新探—』台大出版中心、二〇一二年。

鍾 濤「魏晉南北朝的積奠禮與積奠詩」『文史知識』二〇〇九年第四期。

周予同『中國學校制度』商務印書館、一九三五年。

朱東潤「陸機年表」『國立武漢大學文哲集刊』一九三〇年第一期。

朱 溢「唐代孔廟積奠儀禮新探—以其功能和類別歸屬的討論為中心—」『史學月刊』二〇一一年第一期。

祝總斌「劉裕門第考」『北京大學學報』一九八二年第一期。

(別紙 1)

論文の内容の要旨

論文題目 中国中古の類書と士人社会

氏 名 付 晨 晨

天地万物を分類し、各類目に関連する内容を過去の書籍から抜き出してこれを配列する類書は、曹魏の『皇覧』をはじめ、梁の『華林遍略』、北齊の『修文殿御覽』など、魏晋南北朝期に数多く編纂された。章学誠は漢唐間学術の変化を論じた際、この時期に新たに出現した書籍として類書・文集・書鈔・評選を挙げ、漢代の『七略』の分類法が不可避免的に四部分類法へと発展した要因であると指摘した。また、類書は魏晋南北朝期に主導的地位を占めた門閥貴族の、過去の事例を類聚する伝統主義に基づく文化の代表ともされている。このように、類書は漢唐間の文化・政治を理解する上で重要な手がかりとなる。本論の目的は、中国中古時代の類書が、如何なる背景と目的で編纂され、如何なる時代像を反映しているかという、中古類書の政治的・文化的意義を明らかにすることにある。

本論ではこの問題を解明するために、貴族が社会・文化・制度のあらゆる面で指導的位置に立っていたと考えられている魏晋南北朝期に、皇帝は学校教育や類書編纂などを通じて、如何にそうした指導的地位を貴族から回収し、政治・文化を統合・再建したか、この過程に下級士人層が如何なる対応を示したかに焦点を合わせた。問題提起と先行研究をまとめた序章と、結論と展望をまとめた終章の他に、以下の六章にわたって中国中古の類書と士人社会を論じた。

第一章と第二章は、類書が誕生・発展した魏晋南北朝期の学術状況と士人・皇帝の関係を、国学と学館の設置状況から検討した。第三章から第五章までは具体的に南北朝隋唐期の類書とその編纂について論じた。第六章は目録上の類書に関する問題点を提起し、唐宋期類書観の発展について検討した。以下で各章の内容を紹介する。

第一章は、なぜ南齊では他の時代と異なって皇太子の死によって国学が廃されたのかという点に着目し、魏晉南朝における官学の性格をその設置・沿革から検討した。その結果、各王朝とも皇帝権力を強化するために官学の設置を絶えず目指したことを明らかにした。東晉南朝が官学を設置するにあたって対象とした学生はすべて高門士族の子弟である。しかし、儒学に関心を持たない、さらに身分の低い学生と交わって学習することを好まない高門士族の子弟は、太学ないし国学の入学を拒絶し続けた。結局、東晉南朝の太学・国学はその存続期間が短く、学生の教育と官僚の選抜という伝統的な役割を果たすことができていなかった。一方、東晉南朝における国学は往々にして皇太子や幼年皇帝が積奠礼を執り行う前後に設置された。積奠礼の「講經→饋享→宴会」という一連の過程において、皇太子の身分は「師→弟子→皇太子」と展開した。こうした積奠礼を通じて皇帝権力を支える皇太子と貴族の身分を持つ国子生が上下関係を取り結んだ。以上から、積奠礼は貴族社会の上に成立した東晉南朝の王権が貴族子弟を国家体系に取り込むための儀礼となったことを指摘した。

第二章は、皇帝は如何にして文化上の権威を朝廷の主導の下に再建築したのかという問題を南朝の学館の歴史から検討した。第一章で明らかにしたように、太学・国学では高門士族を官学体系に収めることができていなかった。このような状況で、南朝の皇帝は既存の官学系統には含まれない学館という新たな施設を開設した。劉宋の周統之の学館から梁の五館まで、皇帝は建康の高門士族ではない下級士族、特に地方の士族の力を借りて高門士族も納得する教育・試験制度を少しずつ構築していった。士族の隱士に対する尊重と普遍的な礼学の重視を利用して、劉宋皇帝は長江中上流域の士族圏で活動する周統之や雷次宗などの人士を建康に招待し、建康士族と交流させて相互理解を増進させた。南齊では皇族・高官が大儒の劉瓛を支持することで中央・地方の士族を取り込み、梁では劉瓛の学生が中心となって皇帝の主導する官学体系の再建を推進した。この変化の中に、南朝で拡大した皇帝権力に結びついた下級士族が儒教の知識や蔵書を武器に政権に参加していく動向を見ることができる。以上のような学館を通じた教育政策と文化事業による教育の均一化と教育対象の拡大は、南北朝統一後における科挙の実施の基礎を築いたと考えられる。

第三章は、類書が南朝で盛んに編纂された原因と南朝類書の特徴を検討した。唐代までの類書史を整理することで、『皇覽』を始祖とする意識をもちながら、経史子集にわたる幅広い分野の諸書の記事を引用することで、万事万物の知識を総合する目的で編纂された齊梁期から唐代前期までの類書を初期類書と定義した。そして類書の始祖とされる『皇覽』の出現から唐初までの類書の典型となった『華林遍略』の誕生までの間に三〇〇年の空白が存在す

る原因を、齊梁期の類書編纂の背景、及び曹魏と南朝の類書の差異から追求した。齊梁類書は皇帝の勅命で下級士族が参加して作成されたものである。漢代以前の知識を主とする『皇覽』に対して、齊梁類書は雑伝・地理書を代表とする魏晉以後の史書を大量に収録した。これにより魏晉の知識を含めて「典故化」しようとする齊梁類書へと類書が変化した。ここに新たな典型としての初期類書が生まれた。その背景として、朝廷には知識を收拾・整理して世に示すことで自らの権威を確保し、下級士族には書籍や知識を朝廷に提供することで自分たちのもつ文化資源をより価値のあるものにしようとする志向があったと指摘した。

第四章は、南北朝類書のテキストの差異に注目して第三章で検討した齊梁類書の編纂の学術背景を考察した。南朝類書の引用文の序列は、これまで通説となっていた四部分類順や無順序ではなく、字書（あるいはそれに相当する書籍）を先頭に配置して経部書を続け、その後書籍を並べるものであり、特に『華林遍略』においては他の書籍が時代順で並べられていることを明らかにした。このような構造は、南朝人士の事物を理解する認識方法を反映している。本章は、魏晉南朝の字書・経書・史書と文学作品に対する注釈の歴史を概観し、南朝類書の構造は、魏晉以降の学術における解釈方法（注釈）と同じく、史書を補充する傾向があることを明らかにした。齊梁類書は当時突如として出現したのではなく、その成立背景には魏晉以降の学術の発展、特に史学の発展が密接に関わる。類書が魏晉南北朝時代に発展した背景には、史部書籍の生産と史学意識の発展・拡張があり、これによって豊富な書籍を引用する類書が出現したのであると指摘した。

第五章は、それまで南朝文学の北伝を象徴するものとして見られた『修文殿御覽』の編纂事情を再考した。北朝類書『修文殿御覽』は南朝類書『華林遍略』を底本にするものの、独自の北朝的な特徴を示した。『魏書』をはじめとする北朝の書籍を吸収して北朝の歴史と経学を類書に取り込み、引用書の配列も『華林遍略』の時代順から経史子集の目録順に変更し、北朝類書の伝統を受け継ぐ皇帝の参考書として政治に資する内容を引用書の先頭に配置した。このような変更は、南朝文化の流入と北朝固有の文化との衝突と折衷の結果である。また、『修文殿御覽』編纂の二つの階段とその特徴を分析した。第一段階では、南朝の人士が梁の武帝の事業を継承し、北朝で南朝的な類書を編纂することで自分たちの活躍の場を広げるとともに、魏晉南北朝の文化を統合しようとした。第二段階では、北朝人士が中心となって『修文殿御覽』の編纂を進め、『魏書』を『修文殿御覽』に取り込み目録順に引用書を並べ変えることで、中国古来の歴史を継承する正統国家として北齊を古今・南北の記録・歴

史の中に位置づけようとした。この編纂の背後には北魏分裂による北朝間の国家の正統性をめぐる争いもあったことを指摘した。

第六章は、唐宋の目録が収録した類書の比較検討を通じて隋唐以降の類書の発展状況を再検討した。『旧唐書』経籍志から、少なくとも唐代中期までは『皇覧』を起点とする『華林遍略』『修文殿御覧』などの官撰書籍を類書とする『隋書』経籍志の類書観が継承されており、かつそうした類書観が主流だった。一方、『崇文総目』から宋代以降では分類の体裁が類書の第一の判断基準となった。『新唐書』藝文志は『旧唐書』経籍志が収録した「著録」書籍と『旧唐書』経籍志が収録せずに宋代前期成書の『崇文総目』などが収録した「不著録」書籍を合わせて収録したために、『旧唐書』経籍志の類書観と宋代以降の類書観を混在させてしまった。そのために、政治性の強い官撰類書は実際には唐代中期でもなお類書の中心的地位を占めていたにもかかわらず、目録上では新たに収録された大量の私撰類書に埋もれてしまい、唐代類書の実態が隠れてしまったと指摘した。

本論は類書について、旧来指摘されてきた文化的側面だけでなく、その政治的側面についても検討を及ぼした。類書編纂の基礎となった学術は魏晋南北朝以来発展した貴族文化であるものの、類書編纂の直接の原動力は文化における指導権を門閥貴族から回収して知識を体系化しようとする皇帝の強い意思であり、また下級士族が学問を通じて政界に参加して昇進を図る動きにあった。魏晋南北朝の類書の担い手は高門士族でなく、皇帝と下級士族である。古典知識をまとめた類書が南朝で文化の正統性を宣揚する書籍となったことで、各王朝は類書を編纂する必要に迫られるようになった。斉梁類書の北伝に伴って南朝文化は南北に広まり、隋唐士族の教養ともなった。